

哀しみの馬鈴薯

東京大学名誉教授
日本大学法学部教授

あるが
有賀

ひろし
弘

1. アイルランド農業博物館でのショック

ダブリンから120kmほど南に下った港町ウェックスフォードの近郊で、内陸部に6kmほど入ったところに、13世紀に造られたジョンズタウン城がある。アイルランドの数ある古城の中でも一番美しい城だと謳い文句に誘われてこの城を訪れた。ゴシック様式の建物はたしかに美しかったが、古城という表現はいささかの外れで、それは戦闘・防衛用の城ではなく、美しい庭園をめぐる大領主の居館であった。そして、このような立派な館が造られていたということは、少なくとも東部では、すでに13世紀に、イングランドから侵入してきた勢力がしっかりと根を下していたことを示すもので、アイルランドびいきの私は、若干やりきれない気持ちにさせられたのである。しかし、本当のショックはその後に待っていた。

この館の内部の見学は認められていなかったで、庭園の散策にもあきた私たちは、その一角にあるアイルランド農業博物館に入っていた。これは1945年に開設されたもので、国立かと思われるが詳細はわからない（なにしろ説明のパンフレットさえ置いてない状態だった）。受付には中年の男性が1人だけ居り、入館に際して展示の概要を簡単に説明してくれた。あとはかなり広い館内に人の気配はまったくなく、ここで過した2時間余の間に、他の見学者の姿は1人も見かけなかった。そして、私たちが閉館時間（午後0時半）にかなり遅れて出ていくと、待ちかまえてい

た受付の人は、そそくさと施錠して姿を消してしまった。このような状況から見れば、この博物館が観光客にまったく人気がないことは明らかである。しかし、アイルランド滞在三日目の朝、いわば偶然に入ったこの博物館が、その後の旅行に際して私の視点を拘束し続けるものであったことも確かである。アイルランド共和国は基本的には農業国であり、農業の歴史を知ることにはこの国の理解にとって不可欠であることはもちろんであるが、何よりも大きかったのは、1845年にはじまる大飢饉についての詳しい特別展示（常設）があり、その全容を知ることができたことである。

2. ジャガイモだけで命をつなぐ

アイルランドに関心を抱く以上は、この大

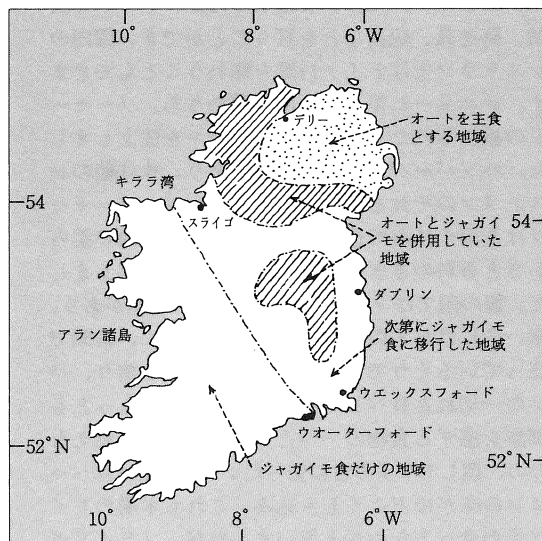


図1 飢饉以前のオート食の地域分布

出展：John Keating, *Irish Famine Facts*,
Dublin：Teagasc. 1996. p9.

飢饉についてもある程度の予備知識は持っていたつもりである。それは、カトリック系住民の主食であったジャガイモ（私の子供の頃は馬鈴薯と呼ばれていた）の生産が、blight（ジャガイモの疫病）のために壊滅的な打撃を受け、その結果として800万を超えていた人口のうち100万以上が餓死（展示ではその90%近くは伝染病による病死とされていた）し、200万以上が移民として海外に出ていったという類のことである。しかし、それらはいかに浅薄な知識であったことか。例えば、たった今「主食であったジャガイモ」と書いたが、大部分の農民、とりわけ「土地なしの労働者」と表現される農民にとっては、ジャガイモは副食つきの主食ではなかった。彼らは、ジャガイモだけを、皮ごと食べて生きていたのである。もちろん、特別の場合には多少の乳あるいは乳製品を口にすることもあったであろうが、基本的にはジャガイモだけだったようである。したがって、成人男子が一日に食べるのは平均で6.4キロに達したという。博物館にはこの量のジャガイモが展示されていたが、それは想像をはるかに超えるものであった。

よく知られているように、ジャガイモはトマトとともに、アンデスの原産である。このことは、少なくとも次の二つのことを意味している。まず第一は、ヨーロッパでジャガイモの栽培が始まったのは16世紀以降だということであり、アイルランドに導入されたのは、16世紀末か17世紀初頭とされている。第二は、ジャガイモは痩せて乾燥した土地でも栽培が可能だということである。最近わが国では、味もよく値段もとびきり高い高級トマトが売り出されているが、これらは原産地の条件に

合わせると称して、水分の補給を極端に制限し、肥料はほとんど与えないで育てたものである（この栽培方法は以前に長崎県の大島で見学したことがある）。もちろん、収穫量の問題はあるであろうが、ジャガイモは最悪の条件の土地でも栽培できるのである。事実「土のない」アラン諸島でもジャガイモは作られてた。訪れた当時は、まだ種イモの植え付けは始まっていなかったが、ここでは100坪ごとに区切られた岩だらけの土地を、強風を避けるために岩を積み重ねた垣で囲み、その中に海岸から拾い上げてきたケルプ（コンブの一種）と海砂とを交互に積み重ねたものが、ジャガイモだけ栽培できる「農地」であった。さらに、本土の西部では、海藻は海岸から30kmの内陸部まで運ばれて「農地」造りに使われたのである。

3. 人口増加を支えたジャガイモ

貧困にあえぐアイルランドの農民にとっては、新しく導入されたジャガイモは素晴らしい農作物だったようである。湿潤な気候は栽培にとって理想的だったし、条件の悪い土地でも植え付けも収穫も簡単だったし、貯蔵も簡単だったのである。場合によっては春まで植えばなしにしておくこともあったようである。そのうえ、食料の生産という観点から考えると、面積あたりのジャガイモは大麦（大部分はイングランドへ輸出）の2倍、燕麦（オート）の3倍の収穫量があったとされている。しかも、皮ごと食べたジャガイモは蛋白質、ビタミン、食物繊維なども含む「完全食品」に近いものであった。また、余ったものは唯一換金可能な、貴重な家畜（主として豚）の餌になる。かくしてジャガイモの普及は、土地も人も貧しい西部の中心に急速に

進み、大飢饉直前の状態ではスライゴの西40kmほどのキララ湾とウェックスフォードの西50kmほどのウォーターフォードとを結ぶ直線の西南部側は、ジャガイモのモノカルチャーの様相を呈していたようである。また、この線の東北部側についてみても、燕麦製品（オートミール）を主食にしていたのは、ほぼ現在の北アイルランドにあたる地域だけであり、他の地域には急速にジャガイモが浸透していったとされている（図1）。

17世紀のアイルランドは、イングランドによる侵略戦争とプランテーション化の時代であった。なかでもクロムウエルの侵略はすさまじく、彼が本国に帰還した後で、アイルランド人の手に残されていた土地は、僅か5%にすぎなかったといわれている（Trinityによる）。しかし、植民地化が完遂されたおかげで、18世紀以降は比較的には平穏な状態が続いたようであり、この時代に急激な人口増加が始まる。1695年にアイルランドの総人口はおおよそ100万人にすぎなかったものが、1802年には540万人に、さらに1841年には820万人にと急増している。そして、この人口増加を支えていたのがジャガイモで、作付面積



▲アラン諸島イニシュモア島にある古代の砦、ドン・エンガス
（大西洋からそそり立つ絶壁の上にある）

は1725年の18万ヘクタールから1845年には86万ヘクタールへと増大している。飢饉直前の1840年代に入ると、年間の収穫量は凡そ1,500万トンで、そのうちの700万トンを人間が食べ、500万トンが家畜の餌にされていたようである。残りの200万トンは種いもで、輸出は僅か25万トン程度であった。

4. 悲惨な土地なき労働者

このように書いてくると、アイルランドの農産物はまるでジャガイモだけのような錯覚に陥りかねないが、事実は全く異なる。1840年代についてみると、凡そ1,500万トン生産されたジャガイモは農業総生産の1/3を占め、残りの1/3づつを穀類と家畜類が占めていたようである。しかし、ここにも問題はあった。すなわち、まず穀類についてみると、現在の北アイルランド（アルスター地方）にあたる地域を中心に消費される燕麦を別にすれば、ほとんど全量がイングランドへ輸出されていた。1815年に制定され穀物法（1846年に廃止）のもとで、イングランドでは穀物の高値が維持されており、1801年以降イギリスの一部であるアイルランドの大土地所有者層にとっては、穀物類は絶好の商品作物だったのである。また、家畜についてみれば、とりわけ西部においては、余ったジャガイモで飼育される豚は唯一換金可能な生産物であった。

農業博物館の展示の中に、「土地なき労働者」（全農民の41%はこのカテゴリーに属していた）である6人家族（両親と子供4人）の一家の1842年の収支表があった。それによると、収支はともに僅か8ポンド5シリングであるが、収入のうちの4ポンドは農場で働いて得た労賃、2ポンド10シリングが豚を売って得られたもの、残りの1ポンド15シリング

は卵、ニワトリなどの売却代金であった（当時のイギリス通貨は十進法ではなかった—20 シリング＝1 ポンド）。これに対して支出の中心は賃借料で、「凄惨な」と表現される一室だけの居住に2 ポンドが、さらに転貸し（作間貸し）された土地にも2 ポンドが支払われている。しかも、この土地では1 年分の食料を生産するには十分ではなく、5 月から、収穫の始まる9 月までを食いつなぐためにジャガイモとオートミール（これでこの農民は西南部の住人ではないことがわかる）に1 ポンド、さらに子豚の仕入れに1 ポンドの支出である。あとは、衣料関係で1 ポンド5 シリング、そしてクリスマスに際して購入される塩等の生活必需品、それに年1 回だけの楽しみである蜂蜜と肉とに合わせて1 ポンドである。これらの数字からは、大土地所有者層の搾取がいかにかいひどいものであったか、そして「土地なき労働者」の生活がいかにか悲惨なものであったかが読み取れるであろう。

5. 襲いかかる疫病の嵐

以上のような状況のもとにあった農民（当時の都市民は全人口の15%程度であった）を blight（疫病）が襲ったのである。アメリカから海を渡って運ばれてきた blight は1844 年末にベルギーに上陸し、翌年の10 月半ばまでには全ヨーロッパに拡がるのであるが、アイルランドでこの病気が最初に確認されたのは8 月20 日のことであり、9 月中旬までにはほぼ全域に拡がっている。ただ、この年はすでに収穫期も近付いていたので、病気はそれほど被害をもたらしたとは見えなかったし、ジャガイモは外見上は大豊作であった。ところが、ジャガイモ栽培に最適で見られていた湿潤な気候が災いをもたらした。ジャガイモ

の葉に取り付いた blight は雨に流されて地下に浸透し、いもそのものを汚染していたのである。汚染されたいもは次々に腐り、全収穫量の4 割が失われた。この影響で翌46 年の作付面積は50 万ヘクタールに低下したが、今度は疫病菌が成長途中の葉と茎を直撃し、8 月初旬までにほとんどのジャガイモが枯死してしまった。収穫量は平年作の1/10 以下の120 万トンに過ぎなかった。

ジャガイモにあまりにも依存していたアイルランドの農村社会、いや北東部のアルスター地方を除くアイルランドの全社会がこれで崩壊した。47 年には、植え付ける種いもも労働力もなく、作付面積は10 万ヘクタールを下回った。だが、皮肉なことにこの年は豊作で、収穫は170 万トンに達した。この結果に力を得て、翌48 年には必死の努力を払って30 万ヘクタールに作付された。しかし、この年には blight が三度目の猛威をふるい、収穫は僅か50 万トンに留まった。こうして、大飢饉は4 年間にわたって続くが、それが終息に向うのは49 年に26 万ヘクタールの作付けに対して430 万トンの収穫が得られたことによってである。この頃までには餓死、病死、移民などによって貧しい農民の数は激減しており、これだけの収穫で食いつなぐことができたのである。もちろん、この間イギリス政府が手をこまねいていたわけではない。しかし、とられる救済策はいずれも生ぬるいもので実効性に欠けていたようである。また、注目に値するのは、イングランドへの穀物の輸出が大飢饉の間もずっと続けられていたことである。農村社会の崩壊によって穀物の収穫も減少するが、それでも餓死してゆく貧農を尻目に、輸出は続いたのである。

6. 避けられなかった移住

移民に対するアイルランド人の考え方は、1846年の2回目の大不作で根本的に変わったといわれる。それまでは移民だけは避けたいと考えていたものが、もし可能なら（少なくとも船賃は必要なので、極貧農にとっては不可能）移民したいと考えるようになったというのである。こうして、1845年から55年の10年間に200万を超える人びとがアイルランドを離れ、そのうち180万はアメリカとカナダ（カナダ経由アメリカ）に向った。そして、カトリックで英語も話せない移民たちは、都市の最下層に沈殿することによってアメリカの社会構造にも影響を与えたのである。展示では「1847年のボストンで、105,000人の市民に37,000人の移民が加わったことを考えてほしい」と書かれていた。

今回の旅行中にパブで話した人びとは、おしなべて陽気で親切であったし、散在する農家もそれなりの暮らしをしているように見えた。その意味では、大飢饉は現代にまでは影を落としてはいないのかもしれない。しかし、現在のアイルランドの人口は、北アイルランドの160万を加えても凡そ510万で、1845年の830万に比較すると320万の減少である。そして、19世紀後半から20世紀前半は、各国で著しい人口増加が見られた時代である。なお、これは農業博物館の展示では一言も触れられていなかった点であるが、大飢饉が終息するとともにアイルランドの独立運動は激化し、次第に武装闘争の様相を強めるようになっていった。

（注 記） 本稿を書くにあたっては、John Keating, Irish Famine Facts, 1996が大変参考になった。著者は農業関係の役人のよう

で、この本は1995年に開催された「大飢饉150年展」を基に書かれたとのことである。アイルランド農業博物館の展示は、内容から判断すると、「150年展」を移したものではないかとも推測される。

付 記

筆者の有賀 弘様は平成11年（1999）4月アイルランド共和国を訪問され、その折の見聞記を「UP」325号～328号（99年11月～2000年2月、東京大学出版会）の4号にわたり寄稿されました。「哀しみの馬鈴薯」は「アイルランド紀行(2)」として326号にのせられたものであります。

325号の「土なき大地」には、この国はほぼ全国にわたり農村地帯ではあるが、岩が露出した痩せた土地がひろがり、緑に乏しく、決して農耕適地に恵まれていないこと。このような恵まれない環境下で嘗て農民は一室だけの惨めな住居で暮らしていたこと、など。

327号の「仮面の共和国」では、過去外敵による侵略がくり返されてきたアイルランドで、人々は千数百年もの長い間、外来の者に対して事を荒立てることなく、表面はおだやかに仮面をかぶり続けてきており、現在でもアイルランド共和国はイギリスとの関係を良好に保つために懸命の努力をし、そのために過去の激しい独立運動のことなどはあまり広く知らさないようにしている、など。328号の「アルスターの憂鬱」は、アイルランド共和国内ではおだやかなカトリックとプロテスタントとの関係が、イギリス統治下の北アイルランド（アルスター地方）では歴史的背景もあって厳しい対立が続き、アイルランド独立後も流血の事件が繰り返されてきたが、最近イギリスとアイルランドの政府間での共同提案による解決の方向が見出されてきたこと。ただ、これによっていままです優位を保ってきたプロテスタント系の人々にとっては、多少なりとも犠牲と忍耐を強いられることになるかもしれないこと。そして、心なしか北アイルランドで出会うカトリック系の人たちは陽気で外来者に親切であり、プロテスタント系は暗い感じであったこと、など。

について記されています。

「哀しみの馬鈴薯」を本誌で広く紹介することに快諾して下さいました有賀先生に、厚く御礼申し上げます。（編集部）